19 ～ 20 世紀前半における右岸バダフシャンのイスマーイール派信徒たち
――アーガー・ハーンとの交渉を中心に――

河原　弥生

はじめに

アムダリヤ上流のパンジ川両岸の渓谷（現在のタジキスタン、アフガニスタン、パキスタンにまたがる山岳地帯）には、イスマーイール派を信奉するいわゆるパミール諸民族が居住している。スンナ派がほとんどを占める中央アジア地域では異色の存在であるが、その歴史はほとんど知られていない。本報告では、現地調査により収集した民間所蔵史料を整理し、19 世紀から 20 世紀前半における彼らと彼らの生けるイマーム、アーガー・ハーンとの交渉について初歩的な分析をおこなった。

1. 歴史的背景

本報告で右岸バダフシャンと呼んでいるのは、パンジ川右岸に位置するタジキスタン共和国山岳バダフシャン自治州のパミール諸民族の居住地域のことである。歴史的には「バダフシャン」は、パンジ川の左岸地域、現在のアフガニスタンのバダフシャン州におおよそ相当する地域であり、その中心地は、ファイズアーバードである。バダフシャンの大部分の住民はダリー語を母語として、スンナ派に属する。バダフシャンの北東の辺境を流れるパンジ川の両岸とその上支流には、ワハン、グント、ヤズグラムなどの渓谷が連なり、それぞれに、ワハン語、シュグナーン語などのパミール諸語を話す諸民族が住んでいる。

この地域は現在主にタジキスタンとアフガニスタンに分断されているが、それは 19 世紀後半の英露間の「グレート・ゲーム」に起因している。熾烈な覇権争いの末、19 世紀末に行われた二度の英露交渉の結果、パンジ川が国境となり、左岸はアフガニスタン領、右岸はロシア帝国の保護国であるブハラ・アミール国領となった。右岸地域は、ロシア革命後幾度もの再編を経てタジク・ソヴィエト社会主義共和国に山岳バダフシャン自治州として編入され、ソ連崩壊後はタジキスタン共和国の中に存続している。

現在、山岳バダフシャン自治州は 7 つの郡から構成される。このうち州の東半分を占めるムルガーブ郡はクルグズの居住地域である。西半分には、北からダルヴァーズ、ヴァンジ、

ローシャーン、シュグナーン、ラーシュトカラ、イシュカシムの 6 つの郡が並び、南部の 4 つの郡にパミール諸民族が居住している。

パミール諸民族はイスマーイール派の一派、ニザール派の分派カースィム・シャー派の信者であり、精神的にはアーガー・ハーン四世（在位 1957–）に従っている。しかし、彼らがこの信仰を受容した経緯についてはほとんど明らかにされていない。

13 世紀のモンゴル軍の襲来によるアラムート陥落後のニザール派の運命はよくわかっていないが、15 世紀半ばにイラン中央部に後継者が現れた（カースィム・シャー派）。また、インドの信徒が「ホージャ」と称して共同体を保ったほか、一部はシリアや中央アジアの山岳地帯で生き延びていた。

カースィム・シャー派のイマームたちは、18 世紀半ば以降ケルマーンの支配者となった。第 46 代イマームを自認したハサン・アリー・シャーは、カージャール朝の君主ファトフ・アリー・シャーの娘婿となり、シャーから、「アーガー・ハーン」の称号を授与された。アーガー・ハーン一世ことハサン・アリー・シャー（在位 1817–1881）は、ケルマーンでの支配権抗争に破れ、1840 年アフガニスタンに脱出した。彼はそこでイギリスの第一次アフガン戦争に協力し、その信頼を得ることになり、ボンベイに移住した。

アーガー・ハーン一世の到来後、ボンベイの「ホージャ」たちとの間に軋轢が生じた。彼は裁判に訴え、1866 年に「ホージャは、イスマーイール派の共同体であり、アーガー・ハーン一世はこの共同体の精神的指導者であり、ホージャから徴収される宗教税は彼に属する」と認める判決を得て勝訴した。こうしてインドにおいて、彼のイマームとしての立場が確定し、ここを拠点に世界の信徒たちへの影響力を行使することになる。彼の死後、後を継いだアーガー・ハーン二世（在位 1881–1885）は 4 年で急死したが、アーガー・ハーン三世（在位 1885–1957）が、その長い在位中に共同体の近代化を推進した。

2. 民間所蔵史料

右岸バダフシャンに関する歴史史料は極めて少ない。ソ連時代には国家主導の史料調査が数度にわたって行われたが、収集史料を用いた歴史研究はほとんど行われていない。

我々は、2009 年と 2011 年に民間所蔵史料の調査を行い [1]、全四郡において 12 のコレクションを収集した。そして 152 点の収集文書を写真版と解題として出版した [2]。

---

[1] 2009 年の調査の参加者は、澤田稔、川本正知、河原弥生、Umed Mamadsherzodshoev の 4 名であった。2011 年の調査はイスラーム地域研究による公募研究「近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に関する基礎研究」として行われ、参加者は澤田稔、稲葉穣、河原弥生、Umed Mamadsherzodshoev の 4 名であった。

[2] Kawahara Yayoi and Umed Mamadsherzodshoev, *Documents from Private Archives in a Right-Bank Badakhshan*

収集文書全体の特徴としては、執筆年代は、1747 年から第二次世界大戦末期のおよそ 200 年にわたり、使用言語は、ペルシア語が大半を占め、他に若干のロシア語とテュルク語のものがある。文書の内容は多岐にわたるが、出版の際にはこれを、I. アーガー・ハーン関連文書（54 点）、II. ムキーに関する文書（8 点）、III. 系譜書（3 点）、IV. 宗教問題に関するその他の文書（5 点）、V. 命令書（13 点）、VI. 証書（52 点）、VII. 書簡（17 点）の 7 種類に分類し、研究上の便宜をはかった。

3. アーガー・ハーンとの交渉

収集文書のうち、最も史料価値が高いものは、I. アーガー・ハーン関連文書である。これを分析すると、最も古い文書は 1849 年のザカートの領収書であり、当該地域のイスマーイール派信徒たちは、アーガー・ハーン一世のインド移住後まもなく、ボンベイ裁判よりはるか前に交渉を持ち始めたと言える。アーガー・ハーンによる命令書からは、アーガー・ハーンが、ムキー（ピール）の任命や信徒間の争いの仲裁など細部に至る指導権を発揮したこともよくわかる。

また、ザカートの領収書からは、この地域の信徒たちが、交渉の最初期からザカートを奉納したことがわかる。地元では、村々の代理人を動員した組織的な徴収が行われた。さらにこれらの領収書の文面を比較検討すると、交渉開始当初はバダフシャン全域から合同でザカート奉納の使節が派遣されたが、時代が下るにつれより狭い地域単位になり、ソ連時代以降はさらにその傾向が顕著になったことが看取できる。これには、ロシア帝国への編入やソ連の成立などの政治事情が影響しているのかもしれないが、より組織的な信徒の管理が進んだ結果と推測することもできよう。

このように当史料群は、この地域の歴史を考察する上で多くの可能性を持つ貴重なものである。

（イスラーム地域研究東大拠点）

(Facsimiles), TIAS: Department of Islamic Area Studies Center for Evolving Humanities, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, 2013; Kawahara Yayoi and Umed Mamadsherzodshoev, *Documents from Private Archives in a Right-Bank Badakhshan (Introduction)*, TIAS: Department of Islamic Area Studies Center for Evolving Humanities, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, 2015